

日本語文藝研究

第15號

【講演】

- 新潟の昔話 橋谷英子 1

【発表論文】

- 中日語彙対照研究—身体語「腕」を用いた表現の意味分布調査— 蘇 鈺甯 27
- 台湾閩南語と日本語の対照研究
—同形漢字語における発音と意味を中心に— 吳 幸芬 49
- 日本語・台閩語における連語の対照研究—「移し変えの結び付き/搬徙組合」へ移行する連語の移行関係についての考察— 施 淑惠 60
- 日本語複合動詞の使用実態調査
—日本語母語話者の意識調査(予備調査)を中心に— 何 志明 85
- 台湾人日本語学習者のカタカナ語学習に関する一考察
—語彙学習におけるインターネットの活用— 金秀英、高柳直彌 107
- 台湾人学習者におけるイ形容詞・ナ形容詞の習得プロセスの一考察 蘇 雅玲 128
- 台湾台南市新化区の中心集落における5歳男児Lの知覚環境形成及び6歳
女児Lの事例(2014)との比較—景観写真による言語描写法を通して— 謝 君慈 143
- 待遇表現の視点から見る日本語の敬称と使い分け意識 黒瀬恵美 168
- 意味の拡張と文法的カテゴリーの変更—現代日本語の「カラ」を中心として— 林 志原 186
- 「日本」は何故「ニホン」と読む事ができるのか。 兒島慶治 197
- 台湾における日本語に影響を受けた「新言語」について 歐 薇蘋 211
- 漢文の日本への伝入と変遷の概観について—古代から近世にかけて— 李 守愛 225
- 遠藤周作の『沈黙』について 林 憲宏 235
- 日本の女性活用推進施策の事例報告
—東北地方の地方銀行6社における女性活用推進施策を事例として— 薄葉祐子 245
- 東日本大震災後の日本国東北地方における第一次産業の再生 渡部順一 269
- 潜在的な意見不一致における男女差—台湾と日本の大学生を対象に— 黄 士瑩 294
- 丹波康頼著『康頼本草』の本質—薬用植物「和名」の研究を中心に— 辜 玉茹 317
- 「学習につなげる課外活動—日本語学習者を対象に—」 白寄まゆみ 332
- 1930年代の台南における台日商業の発展 江 旭本 350
- 国際分業と企業成長の論理—日台企業連携の可能性と課題— 堀 高志 364
- ニューメディアにおける台湾の日本レトロブーム
—歴史以外の視点も含めて— 蔡 嘉琪 376
- 日本の鉄道企業におけるランドマーク建設
近鉄 あべのハルカスを例として 劉 伯雯 401

2015年3月

台灣日本語言文藝研究學會

ISSN 2225-4951

日 本 言 語 文 藝 研 究

第 15 號

2015 年 3 月

台灣日本語言文藝研究學會

日本語文藝研究 第15號 抜刷

日本語複合動詞の使用実態調査
—日本語母語話者の意識調査(予備調査)を中心に—

何 志明

2015年3月

台灣日本語言文藝研究學會

從第一語言為日語之人士的意見調查(試驗調查)結果看

日語複合動詞的運用情況調查

何志明

中国語の要旨

內容提要

複合動詞不單數量多而且能表示多項意思，學習日語之人士要完全掌握所有複合動詞的用法是個極大的負擔。再者，並非所有複合動詞都是常用，因此應考慮優先教授常用的複合動詞。筆者曾調查在語料庫及日語教科書中會經常出現怎樣的複合動詞。不過，在過去的研究發現，當把語料庫與教科書等文字資料及從第一語言為日語之人士直接收集得來的有關運用頻率的數據作比較，兩者並不一定吻合。換言之，在語料庫與教科書等文字資料和第一語言為日語的人士之間，就運用頻率的問題上可能會出現分歧。筆者認為應進行一次調查(正式調查)來鑑別從語料庫和從第一語言為日語之人士收集得來的有關常用複合動詞的數據是否有所不同。此調查其實是以驗證該正式調查的可信程度為目的之試驗調查。此調查向同一組以日語為第一語言的受訪者不同日子進行了合共三次有關複合動詞運用的問卷調查。調查有兩個部分：第一部分是要求受訪者以五個等級的評分來反映其運用複合動詞的情況；第二部分是要求受訪者指出在書寫及談話時會否運用某個複合動詞(此乃是非題)。此調查的結果如下。

首先在複合動詞的運用情況上，連續三次在問卷裏填寫相同答案的受訪者只有約 40%，而在三次問卷中的其中兩次填寫相同答案的受訪者則有約 50%至 60%。其次在書寫及談話時會否運用某個複合動詞的問題上，連續三次在問卷裏填寫相同答案的受訪者約有 75%，而在三次問卷中的其中兩次填寫相同答案的受訪者則有超過 80%。

キーワード：複合動詞、運用情況、試驗調查、語料庫

日本語複合動詞の使用実態調査

—日本語母語話者の意識調査(予備調査)を中心に—

何 志明

要旨

複合動詞は数が多く、多様な意味を持っているものであり、すべてを習得しなければならぬとすれば学習者にとって大変な負担になる。しかも、すべての複合動詞の使用頻度が高いというわけではないので、使用頻度の高いものから教えたほうが効率的であると考えられる。筆者は以前、コーパスと国語教科書にどのような複合動詞がよく出現するかを調査した。しかし、先行研究では、コーパスや教科書などの文字化されたデータを日本語母語話者から直接収集した使用頻度のデータと比較すると、必ずしも一致するとはかぎらないとしている。つまり、コーパスや教科書などのデータと日本語母語話者から得た使用頻度のデータの間にはずれが発生する可能性がある。使用頻度の高い複合動詞について、コーパスから得たデータと実際に日本語母語話者が日常的に使っているもの(使用意識)の間に相違があるかどうかを検証するため、さらなる調査(本調査)を行う必要があるが、本研究はその調査の妥当性を検証するための予備調査を実施することを目的とする。日本語母語話者の調査協力者に複合動詞の使用状況について5段階で評価してもらい、さらに、書く時と話す時に複合動詞を使うかどうかを判断してもらった調査を、同じ調査協力者に対して日を変えて3回実施した。その結果、次のようなことがわかった。複合動詞の使用状況(5段階評価)について、3回ともアンケート用紙に同じ回答を記入した協力者の割合は約40%である。3回のうち2回、アンケート用紙に同じ回答を記入した協力者の割合は50~60%程度である。書く時にも話す時にも複合動詞を使うかどうか(○×評価)について、3回ともアンケート用紙に同じ回答を記入した協力者の割合は約75%程度である。3回のうち2回、アンケート用紙に同じ回答を記入した協力者は80%を超えた。

キーワード：複合動詞、使用実態、予備調査、コーパス

1. はじめに

何(2014a, 2014b)は、大規模コーパス(大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立国語研究所が開発した現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)の「中納言」)及び現在日本の小中高校で使用されている国語教科書を通して現代日本語複合動詞の使用について調査を行い、日本語母語話者なら子供から大人まで使用するというだけでなく、その中でもとりわけ出現頻度が高いものを抽出することができた。石井(2007)によると、複合動詞の数は約 2,500 語に上っている。確かに、すべての複合動詞を習得するのは無理があり、またその中には日本語母語話者もあまり使用していないものが含まれているので、せっかく習っても使う機会がない場合もあると考えられる。複合動詞の習得を促進するためには、まず日本語母語話者がよく使用する複合動詞を洗い出す必要がある。何(2014a)は、その約 2,500 語の複合動詞をコーパス「中納言」で調査し、出現頻度の高かったものをリストアップし、それぞれの複合動詞を「中納言」で検索した結果に基づいて、出現頻度の高い順に並べ替えた。BCCWJの中納言による調査結果から、出現頻度 1 位から 200 位までの複合動詞を選び出した。

表 1 中納言で調査した結果、出現頻度が最も高かった複合動詞 100 語

複合動詞	固定長の数	固定長順位	複合動詞	固定長の数	固定長順位
繰り返す	1605	1	見直す	309	51
思い出す	1472	2	乗り出す	305	52
見付ける	1357	3	思い付く	302	53
見詰める	1203	4	辿り付(着)く	296	54
出掛ける	1006	5	引き摺る	296	54
取り組む	920	6	取り扱う	294	56
受け入れる	909	7	話し掛ける	285	57
出会う	880	8	取り除く	284	58
立ちあがる	868	9	取り込む	282	59
取り上げる	860	10	振り向く	282	59
受け取る	844	11	引き継ぐ	281	61
振り返る	832	12	突っ込む	279	62
落ち付く	774	13	はいり込む	278	63
取り出す	765	14	思い込む	277	64
支払う	667	15	打ち込む	276	65

生み出す	653	16	見込む	273	66
見成す	652	17	結び付ける	273	66
引き続く	640	18	落ち込む	272	68
引っ張る	571	19	付け加える	272	68
作り出す	570	20	駆け付ける	270	70
付き合う	522	21	飲み込む	270	70
取り入れる	513	22	読み取る	266	72
飛び出す	509	23	盛り込む	264	73
申し上げる	492	24	取り巻く	261	74
結び付く	440	25	持ち出す	261	74
飛び込む	437	26	覗き込む	255	76
話し合う	437	26	見送る	255	76
引き上げる	434	28	見回す	254	78
取り戻す	433	29	組み込む	250	79
引き起こす	427	30	持ち上げる	249	80
引き出す	424	31	し掛ける	248	81
出来上がる	406	32	見張る	247	82
見上げる	405	33	言い替える	245	83
受け止める	379	34	受け継ぐ	240	84
成り立つ	372	35	逃げ出す	238	85
組み合わせる	371	36	打ち出す	237	86
引き受ける	361	37	見下ろす	235	87
追い掛ける	358	38	追い込む	234	88
見掛ける	355	39	乗り越える	232	89
持ち込む	346	40	立ち止まる	231	90
差し出す	343	41	盛り上がる	231	90
乗り込む	338	42	見のがす	230	92
思い切る	334	43	呼び出す	230	92
取り付ける	326	44	切り替える	224	94
見守る	323	45	見渡す	222	95
作り上げる	320	46	通り過ぎる	220	96
し上げる	317	47	似合う	216	97
巻き込む	317	47	引き取る	215	98
呼び掛ける	314	49	思い浮かべる	213	99
押し付ける	312	50	指(差)し込む	213	99

砂川(2014)は、コーパスを活用した類似表現に関する調査法としてレキシカルプロファイリングを活用した実質語の調査法を紹介している。レキシカルプロファイリングとは、コーパスを利用して語の共起関係や文法的な振る舞いなどを調査した

情報を蓄積し、その結果を統計的に処理した上で、その語の特徴的な振る舞いを提示するものである(砂川(2014:9))。何(2014b)も BCCWJ の中納言という大規模なコーパスを利用して、出現頻度の高い複合動詞の共起関係を調査した。例えば、中納言での出現頻度が最も高かった複合動詞の「繰り返す」は、「〇〇を繰り返す」という使い方が計 698 回ある。その「〇〇」は次のようなものがある。

こと(52 回)、これ(21 回)、失敗、言葉(14 回)、動作(11 回)

【例文】

小山さんは、地図上のその方角に印をつけます。つぎに、ややはなれたところへ移動します。そこでも、さっきと同じことをします。三回ほど同じことを繰り返して、その方向の線が交わった地点にクマがいるのです。ピコンピコンという音が、まるでクマの心臓の音のようにきこえました。(LBs4_00043)

(太田京子(2004)『人はクマと友だちになれるか?』岩崎書店)

2. 先行研究

永田・茂木(2007:(1)-(8))は、接続助詞「けど」、「けれど」、「けれども」、「けども」、「が」の使い分けについて、日本語母語話者の意識調査の結果とコーパスのデータに基づいて考察を行っている。日本語母語話者の調査は国立大学 1 年生 20 名を対象に行われ、一方、コーパスの調査は、談話資料『日本語話し言葉コーパス (Corpus of Spontaneous Japanese (CSJ))』(国立国語研究所、情報通信研究機構、東京工業大学)を用いて実施された。母語話者の意識をコーパス CSJ のデータと照合した結果、概ね一致しているが、異なる点もあるとしている。また、森(2011:319-341)では、多くの日本語教科書では着点を示す「に」・「へ」を提示しているが、「へ」を導入するのは日本語教育の勝手な都合ではないかと指摘している。森(2011)は、そもそも現代において日本語母語話者は「へ」を使用しているかという疑問を投げ掛け、日本語教科書調査、現代語大規模コーパス BCCWJ 2009 の調査、学習者コーパス調査、言語使用調査で検証した。その結果、以下のようなことがわかった。

- a どの調査でも「に」より「へ」のほうが圧倒的に使用が少ない。
- b 少なくとも初級では「に」と「へ」をアウトプット(話す・書く)で使い分

けられるように教える必要がない。

以上の先行研究から、母語話者の意識とコーパスによるデータの間はずれが生じる可能性があることが判明した。

3. 本稿の目的

使用頻度の高い複合動詞について、コーパスから得たデータと実際日本語母語話者が日常的に使っているもの(使用意識)の間に相違があるかどうかを検証するため、さらなる調査(本調査)を行う必要があるが、本研究はその調査の妥当性を検証するための予備調査を実施することを目的とする。

4. 予備調査の手順

4.1 調査協力者

本調査は、東京都内にある私立大学の教員、職員、大学院生(計 10 名)の協力を得て行われた。協力者の年齢分布は以下の通りである。

年齢層： 20～25 歳 (2 名)

26～30 歳 (2 名)

31～35 歳 (3 名)

41～45 歳 (2 名)

50～55 歳 (1 名)

本調査では、調査協力者の回答を毎回正確に把握する必要がある。回答の追跡を可能にするため、記名調査にした。

4.2 調査期間

協力者の回答に変化があるかどうかを確認するため、調査を計 3 回実施した。調査日は 2013 年 7 月 11 日(木)、2013 年 7 月 18 日(木)、2013 年 7 月 25 日である。

4.3 調査方法

本調査は紙媒体のアンケート用紙を事前に用意し、各協力者に配布した。アンケート用紙を配布した日の朝、協力者にできるだけ同日のうちに筆者に記入済のアンケート用紙を返却してもらうように伝えた。もしどうしても無理な場合は翌日に返却してもらう方法を採用した。回収する作業はすべて筆者が自ら行った。

4.4 予備調査用の複合動詞

本調査を実施する前に、何(2014a)から得た使用頻度の高い複合動詞(BCCWJの「中納言」より)約100語のうち、20語を選出した。本調査の妥当性を検証する目的なので、使用頻度の比較的高いものも低いものも含まれている。

4.5 アンケート用紙の構成

本調査は第1部と第2部の2部構成になっている。第1部は、協力者の名前と年齢層、つまり個人情報である。第2部は、協力者の複合動詞の使用意識調査である。

4.6 アンケート用紙の内容

前述したように本調査は3回実施された。それぞれの回のアンケート用紙の第1部は共通であるが、第2部は、協力者に複合動詞の提示順位から同じ問題だと気づかれないように、選出された20語の複合動詞の提示順序を毎回変更した。第1回(2013年7月11日)のアンケート用紙はサンプルとして付録1に示されている。それぞれの回の第2部の複合動詞の出題順は以下の通りである。各複合動詞の右の括弧内にある数字は、BCCWJの「中納言」に出現した回数である(表1を参照)。

	問題番号	問題番号	問題番号
<u>複合動詞(順位)</u>	<u>1回目</u>	<u>2回目</u>	<u>3回目</u>

受け入れる(7)	01	20	15
取り上げる(10)	02	12	09
振り返る(12)	03	11	19
引っ張る(19)	04	15	12
取り入れる(22)	05	17	10
引き起こす(30)	06	10	01
受け止める(34)	07	18	11
持ち込む(40)	08	05	17
見守る(45)	09	16	02
押し付ける(50)	10	02	16
乗り出す(52)	11	03	07
取り扱う(56)	12	19	04
思い込む(64)	13	09	20
結び付ける(66)	14	07	06
持ち出す(74)	15	04	08
組み込む(79)	16	13	03
言い換える(83)	17	08	05
立ち止まる(90)	18	14	13
呼び出す(92)	19	06	14
思い浮かべる(99)	20	01	18

5. 予備調査の結果

回収したアンケート用紙のデータを集計し、協力者の回答の変化を考察する。1回目と2回目(5.1節)、2回目と3回目(5.2節)、1回目と3回目(5.3節)、1回目と2回目と3回目(5.4節)の順番で考察していく。考察項目は次のようなものである。

- a 個人の複合動詞の使用状況について、それぞれの回のアンケート用紙に同じ回答(5段階評価)を記入した協力者の割合
- b 書く時において、それぞれの回のアンケート用紙に同じ回答(使うなら○、

使わないなら×)を記入した協力者の割合

- c 話す時において、それぞれの回のアンケート用紙に同じ回答(使うなら○、使わないなら×)を記入した協力者の割合

5.1 1回目と2回目のアンケート調査の比較

1回目と2回目のアンケート用紙のデータから、一致している結果の割合は以下の通りである。なお、以下5.1~5.3の複合動詞の順番はすべて1回目のアンケートに準ずる。

<u>複合動詞</u>	<u>使用状況</u>	<u>a. 書くとき</u>	<u>b. 話すとき</u>
受け入れる	40%	100%	70%
取り上げる	90%	80%	100%
振り返る	60%	80%	80%
引っ張る	80%	90%	90%
取り入れる	30%	80%	70%
引き起こす	40%	90%	70%
受け止める	50%	80%	60%
持ち込む	60%	100%	100%
見守る	20%	80%	90%
押し付ける	60%	80%	80%
乗り出す	50%	90%	80%
取り扱う	40%	90%	80%
思い込む	60%	80%	100%
結び付ける	70%	70%	70%
持ち出す	40%	100%	90%
組み込む	20%	80%	80%
言い換える	60%	70%	70%
立ち止まる	50%	70%	90%

呼び出す	70%	80%	100%
思い浮かべる	40%	100%	90%
全体	51.5%	84.5%	83%

まず、使用状況を見てみよう。使用状況について「取り上げる」は90%という数字が出ている。つまり、10人中9人が1回目も2回目も同じ回答を記入したということである。逆に、「見守る」と「組み込む」の場合は、1回目、2回目とも同じ回答を記入した人は2人(20%)しかいないということになる。調査協力者全員の回答によると、1回目、2回目とも同じ回答を記入した割合は全体の約51.5%である。次に、書く時において、1回目も2回目も同じ回答(使うなら○、使わないなら×)を記入した協力者の割合を見てみよう。結果から言うと、全体的に一致している割合が高いといえる。例えば、「受け入れる」、「持ち込む」、「持ち出す」、「思い浮かべる」の場合はすべて100%で、つまり、1回目、2回目とも同じ回答を記入した人は10人中10人(100%)である。一番低い場合(「結び付ける」、「言い換える」、「立ち止まる」)でも同じ回答を記入した協力者が7人(70%)いる。また、話す時においても、全体的に一致している割合が高いといえる。

5.2.2 回目と3回目のアンケート調査の比較

2回目と3回目のアンケート用紙のデータから、一致している結果の割合は以下の通りである。

<u>複合動詞</u>	<u>使用状況</u>	<u>a. 書くとき</u>	<u>b. 話すとき</u>
受け入れる	70%	100%	70%
取り上げる	80%	90%	80%
振り返る	60%	70%	90%
引っ張る	70%	60%	90%
取り入れる	60%	80%	70%
引き起こす	60%	80%	70%

受け止める	60%	70%	70%
持ち込む	60%	100%	100%
見守る	50%	80%	80%
押し付ける	60%	70%	60%
乗り出す	60%	60%	80%
取り扱う	50%	90%	90%
思い込む	70%	90%	100%
結び付ける	70%	90%	90%
持ち出す	50%	100%	90%
組み込む	30%	80%	80%
言い換える	90%	80%	80%
立ち止まる	70%	80%	100%
呼び出す	80%	70%	90%
思い浮かべる	50%	100%	90%
全体	62.5%	82%	83.5%

使用状況について全体的な割合を見ると、2回目と3回目の結果(62.5%)のほうが1回目と2回目の結果(51.5%)より高くなった。さらに、書く時または話す時、それらの複合動詞を使うかどうかという質問に関しても、1回目と2回目の結果と比べてもあまり差がない(約83%)。つまり、書く時も話す時も全体的に一致している割合が高いといえる。

5.3 1回目と3回目のアンケート調査の比較

1回目と3回目のアンケート用紙のデータから、一致している結果の割合は以下の通りである。

<u>複合動詞</u>	<u>使用状況</u>	<u>a. 書くとき</u>	<u>b. 話すとき</u>
受け入れる	70%	100%	80%

取り上げる	90%	90%	80%
振り返る	80%	90%	70%
引っ張る	50%	70%	80%
取り入れる	50%	100%	100%
引き起こす	50%	70%	100%
受け止める	60%	60%	70%
持ち込む	80%	100%	100%
見守る	60%	60%	70%
押し付ける	60%	90%	80%
乗り出す	50%	70%	100%
取り扱う	70%	100%	90%
思い込む	60%	70%	100%
結び付ける	50%	80%	60%
持ち出す	60%	100%	100%
組み込む	40%	100%	100%
言い換える	50%	70%	70%
立ち止まる	60%	90%	90%
呼び出す	60%	90%	90%
思い浮かべる	30%	100%	80%
全体	59%	85%	85.5%

使用状況について、1回目と3回目の全体的な一致の結果も約6割(59%)を維持している。また、書く時も話す時も全体的に一致している割合が依然高い(約85%)といえる。

5.4 1回目、2回目、3回目のアンケート調査の比較

5.4.1 回答がすべて一致している場合

全3回のアンケート用紙のデータから、一致している結果の割合は以下の通りである。

複合動詞	使用状況	a. 書くとき	b. 話すとき
受け入れる	40%	100%	60%
取り上げる	80%	80%	80%
振り返る	50%	70%	70%
引っ張る	50%	60%	80%
取り入れる	20%	80%	70%
引き起こす	30%	70%	70%
受け止める	40%	60%	50%
持ち込む	50%	100%	100%
見守る	20%	60%	70%
押し付ける	50%	70%	60%
乗り出す	40%	60%	80%
取り扱う	30%	90%	80%
思い込む	50%	70%	100%
結び付ける	50%	70%	60%
持ち出す	30%	100%	90%
組み込む	0%	70%	80%
言い換える	50%	60%	60%
立ち止まる	40%	70%	90%
呼び出す	60%	70%	90%
思い浮かべる	20%	100%	80%
<u>全体</u>	<u>40%</u>	<u>75.5%</u>	<u>76%</u>

最後に、全3回のアンケート用紙の調査結果を通して見てみよう。いうまでもなく、どの数字も100%に近づけば近づくほど調査の信頼性が増

していくという結果になる。使用状況の結果を見てみると、やはり 3 回とも同じ使用状況の評価をした協力者の割合は 40%まで下がっている。つまり、10 人中 4 人しかいない。「取り上げる」の場合は高い割合(80%)で一致しているが、「組み込む」の場合は 0%であり、協力者のだれ 1 人として 3 回続けて同じ回答をすることはなかった。しかし、書く時または話す時の使用状況については、全体的に高い結果が出ているといえる。書く時の場合、3 回続けて同じ回答をした人の割合は 75.5%で、話す時の場合に 3 回続けて同じ回答をした人の割合は 76%である。

5.4.2 回答が一致していない場合

回答が一致していない場合、協力者の回答はどのようにずれているのだろうか。本節では 3 回のアンケートのうち合計 1 レベルの差(例えば、1 回目の回答は 5、2 回目も 3 回目も 4 のように、3 回のうちの 2 回は同じ回答をし、残りの 1 回の回答はほかの 2 回と比較して 1 レベルのみの差があること)のずれしか出ていない回答を見てみよう。

複合動詞	1 レベルの差(1)	一致している割合(2)	(1)+(2)
受け入れる	50%	(受け入れる 40%)	90%
取り上げる	20%	(取り上げる 80%)	100%
振り返る	50%	(振り返る 50%)	100%
引っ張る	50%	(引っ張る 50%)	100%
取り入れる	80%	(取り入れる 20%)	100%
引き起こす	60%	(引き起こす 30%)	90%
受け止める	50%	(受け止める 40%)	90%
持ち込む	50%	(持ち込む 50%)	100%
見守る	70%	(見守る 20%)	90%
押し付ける	10%	(押し付ける 50%)	60%
乗り出す	40%	(乗り出す 40%)	80%
取り扱う	70%	(取り扱う 30%)	100%

思い込む	40%	(思い込む	50%)	90%
結び付ける	40%	(結び付ける	50%)	90%
持ち出す	60%	(持ち出す	30%)	90%
組み込む	90%	(組み込む	0%)	90%
言い換える	40%	(言い換える	50%)	90%
立ち止まる	50%	(立ち止まる	40%)	90%
呼び出す	30%	(呼び出す	60%)	90%
思い浮かべる	60%	(思い浮かべる	20%)	80%
<u>全体</u>	<u>50.5%</u>		<u>40%</u>	<u>90.5%</u>

以上の結果から、3回のアンケートのうち合計1レベルの差しか出ていない回答を3回とも同じ回答を出した回答と合わせると全体の約90%になった。では、合計1レベルの差においてそれぞれのずれの分布を詳しく見てみよう。

<u>複合動詞</u>	<u>5-4</u>	<u>4-3</u>	<u>3-2</u>	<u>2-1</u>	<u>(合計)</u>
受け入れる	30%	10%	10%	0%	(50%)
取り上げる	10%	0%	10%	0%	(20%)
振り返る	20%	20%	10%	0%	(50%)
引っ張る	40%	10%	0%	0%	(50%)
取り入れる	40%	20%	20%	0%	(80%)
引き起こす	10%	20%	30%	0%	(60%)
受け止める	40%	10%	0%	0%	(50%)
持ち込む	30%	10%	10%	0%	(50%)
見守る	20%	40%	10%	0%	(70%)
押し付ける	10%	0%	0%	0%	(10%)
乗り出す	10%	10%	20%	0%	(40%)

取り扱う	30%	20%	20%	0%	(70%)
思い込む	20%	20%	0%	0%	(40%)
結び付ける	20%	0%	20%	0%	(40%)
持ち出す	30%	10%	20%	0%	(60%)
組み込む	10%	40%	40%	0%	(90%)
言い換える	10%	30%	0%	0%	(40%)
立ち止まる	20%	10%	20%	0%	(50%)
呼び出す	20%	10%	0%	0%	(30%)
思い浮かべる	20%	20%	20%	0%	(60%)
<u>全体</u>	<u>22%</u>	<u>15%</u>	<u>13%</u>	<u>0%</u>	<u>50%</u>

※ 例えば、「5-4」の場合はアンケートを3回実施した結果、「5」(よく使う)と「4」(使う)という回答しか出ていないことを示す。

以上の結果から、全体的「5-4」という回答の組み合わせが一番多く、次に多いのは「4-3」(使うー時々使う)という組み合わせで、「2-1」(あまり使わないー使わない)という組み合わせはないということがわかった。

6. 結果の分析

本研究は、日本語複合動詞の使用実態調査を実施する前に、日本語母語話者の意識調査を予備調査として実施し、調査協力者の回答について以下の項目を調査した。

- a 個人の複合動詞の使用状況について、それぞれの回のアンケート用紙に同じ回答(5段階評価)を記入した協力者の割合
- b 書く時において、それぞれの回のアンケート用紙に同じ回答(使うなら○、使わないなら×)を記入した協力者の割合
- c 話す時において、それぞれの回のアンケート用紙に同じ回答(使うなら○、使わないなら×)を記入した協力者の割合

本調査の結果を整理すると、次のようなことがわかった。

- 1 複合動詞の使用状況について、3回ともアンケート用紙に同じ回答(5段階評価)を記入した協力者の割合は約40%である。そのうちの2回ともアンケート用紙に同じ回答を記入した協力者の割合は約50~60%である。
- 2 書く時にも話す時にも複合動詞を使うかどうかについて、3回ともアンケート用紙に同じ回答(○×評価)を記入した協力者の割合は約75%程度である。3回のうち2回、アンケート用紙に同じ回答を記入した協力者は80%を超えた。

複合動詞の使用状況(5段階評価)について、協力者の回答にはある程度の一致性が見られるが、信頼性が高いとは言いがたい。しかし、複合動詞をどのような時に使うかという質問に対しては、比較的安定した結果が得られたといえよう。

7. おわりに

本研究では、意識調査の可能性と限界を考察した。言語使用調査は万能であるわけではない。コーパスと言語使用調査、それぞれの特性と限界を知り、相互補完するように使用すべきである(森(2011:326))。今後の課題として、本研究の結果を踏まえ、日本語母語話者の複合動詞の使用意識を反映する調査方法を構築することを目指したい。

謝辞(Acknowledgment)

プライバシー保護のため、調査協力者お一人お一人のお名前を挙げることはできませんが、本調査にご協力くださった皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、Research Grants Council, Hong Kong による"General Research Fund for 2011/2012"研究助成金(課題名称："The Usage of Japanese Compound Verbs"、課題番号：445811)を受けて実施したものです。

(This research is supported by the "General Research Fund for 2011/2012",

Research Grants Council, Hong Kong (Project title : "The Usage of Japanese Compound Verbs", Project code : 445811)).

参考文献

- 石井正彦(2007)『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 何志明(2010a)「香港の上級日本語学習者による日本語複合動詞の習得に関する調査」『東洋文化研究』第12号, pp. 491-510.
- 何志明(2010b)「習得しやすい日本語複合動詞とは何か?—香港人中上級日本語学習者の習得及び使用実態予備調査を通して」『日本語／日本語教育研究』1, pp. 227-244. 日本語／日本語教育研究会
- 何志明(2012)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び中上級日本語教科書における複合動詞の出現頻度」『日本語／日本語教育研究』vol.3, pp.261—276.
東京：日本語／日本語教育研究会
- 何志明(2014a)「日本語母語話者はどのような複合動詞をよく使用しているか—大規模コーパスと国語教科書の調査結果を通して—」『2014年度日本語教育学会春季大会予稿集』, pp.309—314. 東京：公益社団法人日本語教育学会
- 何志明(2014b)「日本語複合動詞のコロケーション—大規模コーパスの調査結果を通して—」『韓国日本語學會第30回國際學術發表大會予稿集』, pp.61—80.
ソウル：韓国日本語學會
- 砂川有里子(2014)「コーパスを活用した日本語教師のための類似表現調査法」『日本語／日本語教育研究』vol.5, pp.7-27. 東京：日本語／日本語教育研究会
- 永田良太・茂木俊伸(2007)「接続助詞のスタイルをどう捉えるか：母語話者の意識調査とコーパスの分析から」『語文と教育』21, pp. (1)–(8). 鳴門教育大学
- 森篤嗣(2011)「着点を表す助詞「に」と「へ」における日本語母語話者の言語使用について」森篤嗣・庵功雄(編)『日本語教育文法のための多様なアプローチ』pp. 319—341, ひつじ書房

香港中文大學日本研究學系 副教授

2013-7-11

【第1部】

1. お名前： _____

2. 年齢：[該当する に「✓」をご記入ください。]

20 ～ 25 歳

26 ～ 30 歳

31 ～ 35 歳

36 ～ 40 歳

41 ～ 45 歳

46 ～ 50 歳

50 ～ 55 歳

56 ～ 60 歳

60 歳以上

【第2部】

下記のそれぞれの質問に対して、一番あなたの意見に近いと思う番号を丸で囲んでください。

- 1 下記の複合動詞について、あなたの使用状況を教えてください。5～1について、あなたの意見に最も合うものを1つだけ選び、その番号を丸で囲んでください。

	よく使う	使う	時々使う	あまり使わない	使わない
01 受け入れる	5	4	3	2	1
02 取り上げる	5	4	3	2	1
03 振り返る	5	4	3	2	1
04 引っ張る	5	4	3	2	1
05 取り入れる	5	4	3	2	1
06 引き起こす	5	4	3	2	1
07 受け止める	5	4	3	2	1
08 持ち込む	5	4	3	2	1
09 見守る	5	4	3	2	1
10 押し付ける	5	4	3	2	1

使わない

あまり使わない

時々使う

使う

よく使う

11	乗り出す	5	4	3	2	1
12	取り扱う	5	4	3	2	1
13	思い込む	5	4	3	2	1
14	結び付ける	5	4	3	2	1
15	持ち出す	5	4	3	2	1
16	組み込む	5	4	3	2	1
17	言い換える	5	4	3	2	1
18	立ち止まる	5	4	3	2	1
19	呼び出す	5	4	3	2	1
20	思い浮かべる	5	4	3	2	1

II 質問 I において、日常生活のどのような場面で使うかを教えてください。

当てはまるものに「○」、当てはまらないものに「×」をご記入ください。

(*複数回答可)

a. 書くとき b. 話すとき

01 受け入れる		
02 取り上げる		
03 振り返る		
04 引っ張る		
05 取り入れる		
06 引き起こす		
07 受け止める		
08 持ち込む		
09 見守る		
10 押し付ける		

a. 書くとき b. 話すとき

11	乗り出す		
12	取り扱う		
13	思い込む		
14	結び付ける		
15	持ち出す		
16	組み込む		
17	言い換える		
18	立ち止まる		
19	呼び出す		
20	思い浮かべる		

ご協力どうもありがとうございました。

日本語文藝研究 第15號
Riben yanyu wenyi yanjiu No.15

發行年月日 2015年3月31日

發行所 台灣日本語言文藝研究學會

通訊處 台南市歸仁區長大路1號
長榮大學應用日語系

電話 (06) 278-5123 轉 4251・4252

ISSN 2225-4951
